

有美軒在畫說

復編

No.	13
函號	5
書號	273
內開	

植  
第  
十  
六  
號

東京  
衛  
生  
館

丙  
子  
179

97

27

471.9
K1
11618

長  
安  
街  
漢  
碑

乙 179 p. 2

東衛

有毒草木圖說後編目錄

藜蘆  
紫藤  
羌花  
石南  
莽草  
衛矛  
楊樞  
漆  
烏白木

水仙  
雲實  
醉魚草  
常山  
夾竹桃  
羊躑躅  
金剛藤  
蠟梅  
櫻木  
嬰子桐

狗舌草  
羌花  
木本黃精葉鉤吻  
茵芋  
木藜蘆  
楨桐  
槐木  
椶櫚  
無患子  
棟

三十二品

有毒草木圖說

附錄

芋  
胡瓜  
大蒜  
茄  
菘菜  
菠薐  
玉蜀黍  
甘蔗  
秦椒  
銀杏

二十八品

番椒  
番南瓜  
山蒜  
水蘄  
土芋  
煙草  
水蘿蔔  
羊栖菜  
桃

甜瓜  
青葱  
藟  
つるな  
葛草  
藁荷  
筍  
杏

明治九年購求

有毒草木圖說後編

張府

舍人清原重巨輯  
男 重光校

藜蘆

本草綱目

大毒ありあねふ二種あり其一種ハ春宿根より生じ葉粗初生の  
椶櫚葉に似て縦文あり其本小棕竹皮乃如き者有て莖或裏む  
夏心中より一莖を抽ぐ末小枝を分ち小花を開く六瓣紫黑色  
花後實を結ぶ是葱管藜蘆 藜蘆秋名 かり誤てふを食すれ  
む卒嘔暴瀉も又此根を散とかり鼻小入さバ嚏を發し一種ハ  
春宿根より生じ形萎蕤小似る肥大夏莖末に枝を分ち六瓣の

有毒草木圖說

後

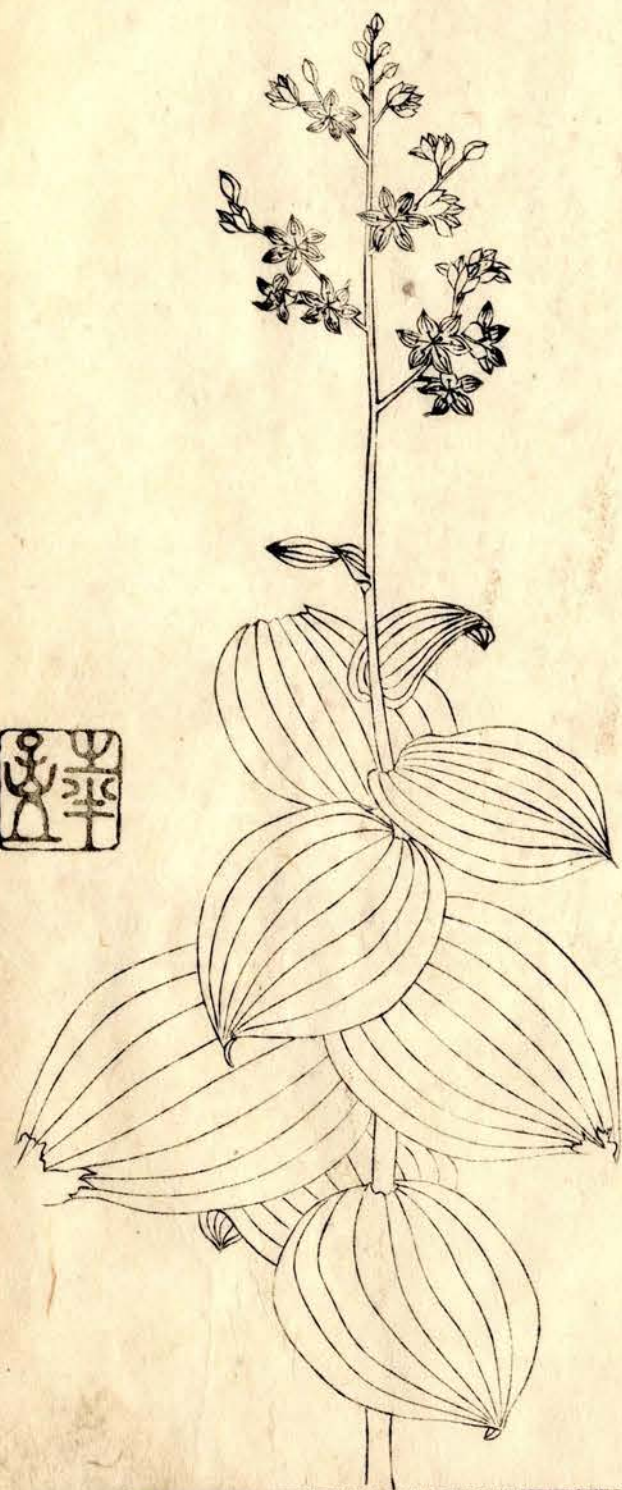
花を開く白色微綠色を帯ぬ是蒜藜蘆 本草原始 かり誤てふ  
を食されバ吐氣を發し此根を採る 飯中に雜へ蠅ハ飼バ即死  
故小をひのどくとも云ぬ此二品孕婦小兒誤り食されバ必  
害あり



有毒草木圖說

後

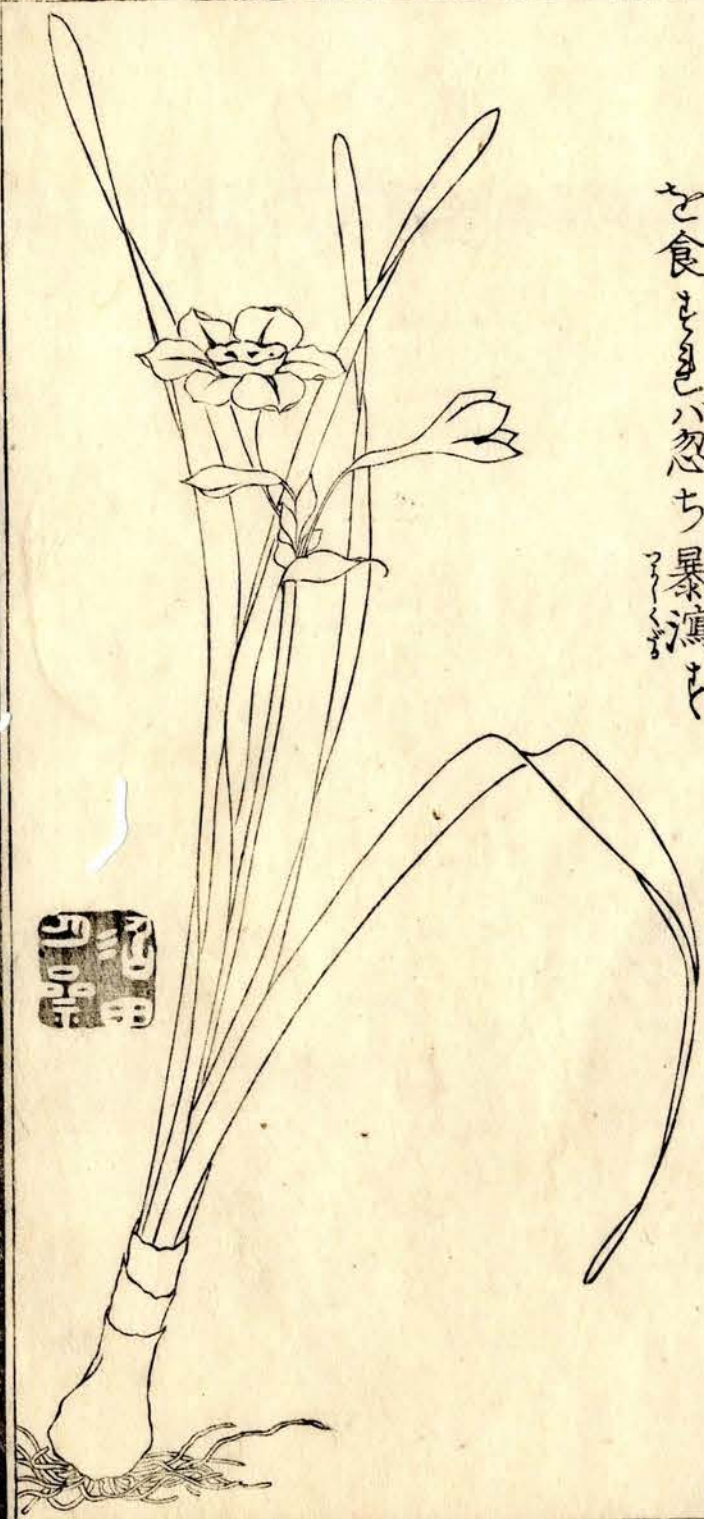
二



水仙

本草綱目  
和漢通名

毒あり夏培壅もぐ根山蒜の如し冬に至り四葉生ト根上  
白皮有て葉乃本紙裏む心中より一莖生ト六瓣乃白花  
を開き中に黄色け筒をち葎の香氣を發も誤て根  
を食も色ハ忽ち暴瀉も



狗舌草 くごくさ 本草綱目

小毒あり春池澤及び溝瀆中に生じ羊蹄乃葉に似る小く  
 厚して互生し莖葉ともに白毛あり心中より莖葉抽て莖頭  
 小枝を分ち黄色乃花を開く形旋覆花の如く又千葉乃之の  
 わりとくやうゆくと云ぬ其一種なり



有毒草木圖説

後

三

紫藤 あぶら 本草綱目

小毒あり山中及び叢林中に生じ蔓生大きき者ハ樹の如  
 く春葉成生じ其花紫色下垂し長そのハ五六尺小及ぬ  
 花後莢を結ぬ又白花乃者或ハ白ハふぢと云ふあり其一種也  
 委くハ性譜小舉ぐ



雲實 うんざく

本草綱目

毒あり山野に生け木の高さ丈餘及び蔓如く蔓延枝幹に尖刺甚多一春葉を生け自葉乃形小似う莖に刺多一暮陰に至り兩々相合以夏枝末に黄花連生一穂とあり後葉を結ぬ熟き色ハ栗殼色中に子あり此花誤て食すと急忽狂走



有毒草木圖說

後

四

芫花 げんか

本草綱目

大毒あり小木高さ二三尺小過ず春花張開く四瓣淡紫色枝毎小攢簇一稀實を結ぬ花終り葉を生じ毛茸有り穂挿て能活寸此葉を揉て池水乃中に投むれば魚皆死む故子魚毒種の名あり其魚必ば食すと急大毒あり



*Buddleja*  
*Lozanace*

堯花 ぎょうか

本草綱目

毒あり小木高さ三四尺枝葉對生、葉堯花葉に似、薄、秋  
枝梢に枝を分ち四瓣黄色、筒花を開、堯花子似、又、かん  
びの葉堯花葉に似、互生、葉密、夏秋乃際枝梢に四瓣小白花を  
開、或ハ紙を漉かん、びの高、丈餘、及び葉も大なり、四瓣の小花簇  
々開、筒白色、瓣黄色、是皆其一種なり



有毒草木圖說

後

五

醉魚草 すいぎょそう

本草綱目

小毒あり小木葉對生、秋枝を生、花を開、淡紫色筒花を  
一穗乃如一横斜、花後實を結、此葉を採、池中に投、れ  
ハ魚皆死、其魚必以食也

ベニバ





木本 黄精 葉鉤吻

本草綱目鉤吻正誤

大毒あり山中に多く生じ木の高さ五六尺及ぬ葉對生  
葉莖赤色葉面三縱道あり夏花を生じ穂を著し紅白色  
満開せば後扁實を結ぬ熟して赤色誤く白色を食は  
る者死す及ぬ鳥此實を喰ふ即死又此葉を採り採て飯

沖に雜へ鼠小飼バ即死其甚く懼へま  
者なりと



有毒草木圖說

後

六

ハセウノキ

瑞香 本草綱目 一種  
漢名未詳

毒あり深山小生小形結香に似る枝三四極春舊枝  
乃末に花を開く淡黄色四瓣瑞香花乃如く攢簇花  
後實を結ぶ夏熟すれば紅色枸杞の如く誤るは甚く食す  
辛辣故に胡椒乃名を冒す

ハセウノキ



常山 オウゴン

本草綱目

毒あり山中に生れ小木其葉茶子似て光滑文理有り臭氣甚し春花散開く四瓣綠色簇生花後實成結成球形蠅貝乃如く又海州常山常山集解臭梧桐羣芳譜ハ山中及び村落處々に生れ臭氣甚し毒あり和俗具



有毒草木圖説

後

七

茵芋 アキノ

本草綱目

毒あり山中に生れ小木おろろ二三尺小過ず葉前後左右互生葉莖赤色枝梢小白花を開き褐色を帯ぬ花後實を生れ秋後赤色南爛乃實より大きかり

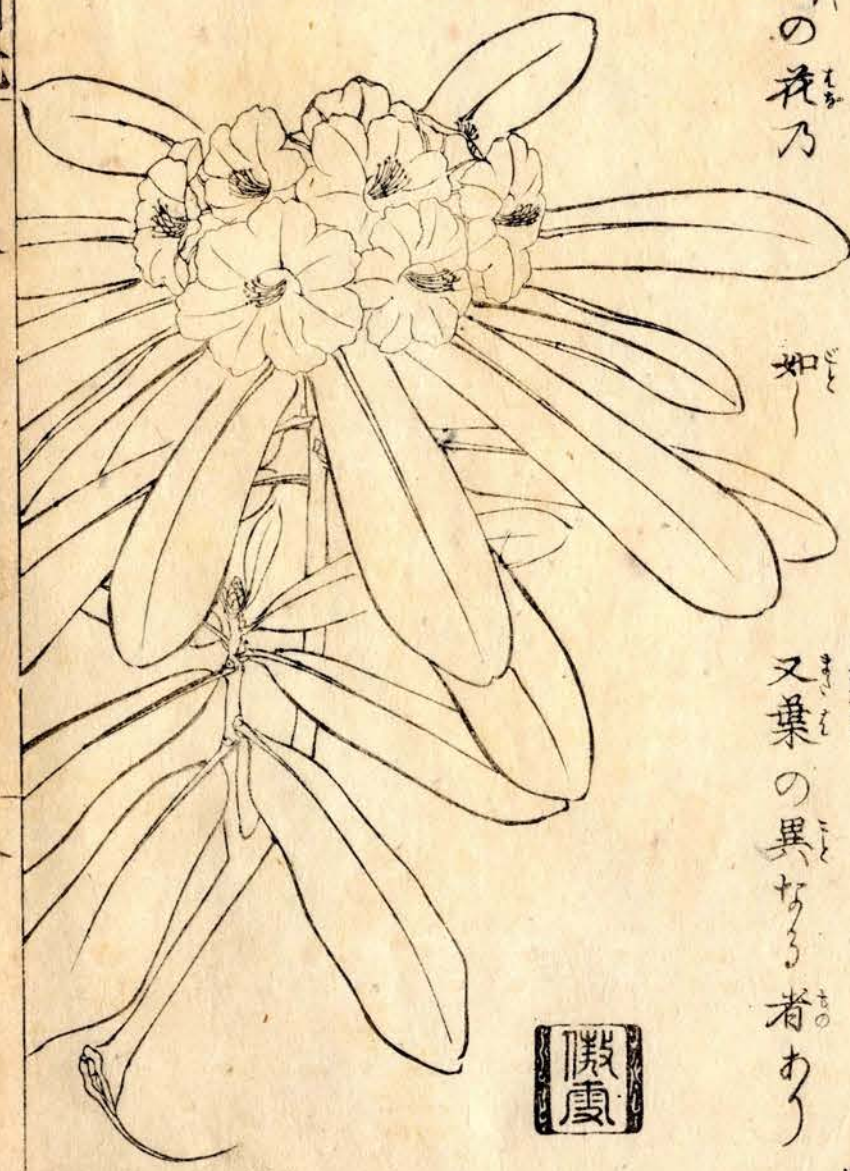


石南 セキナン

本草綱目

毒あり深山小生む冬葉凋ま冷頗る凍氣を畏る春新葉を生じ枝頭小薄紅色の花を開き、攢簇も一花の形粗山躑躅の花乃如

又葉の異なる者あり



儼虞

有毒草木圖說

後

八

夾竹桃 ハヤブサ

秘傳花鏡 和漢通名

毒あり暖國乃産し、寒を畏る冬霜雪を避べ、高さ五六尺葉細長粗竹葉乃形小似、微細、夏枝梢小薄紅花を開く一朶數萼、色を壓枝、もろに夏中竹管を以、其枝節を挾肥土を用、養バ、即根を生じ、截、植ベ



儼虞

木藜蘆 本草綱目

毒有り 小木山中に生じ 枝多く 互生し 葉面浅緑色 葉背浅白色 互生し 夏新枝乃末に花を開く 穂の如く 花後實成 結成 此葉採り 揉み 鼻中に入せば 即噴鼻し 又廁中に入せば 虫皆死し 或ハ云ぬ 此葉を廁中に懸せば 痢疾を避ると



豊文



有毒草木圖説

後

九

芥草 本草綱目

毒あり 山中に生じ 葉冬成 経て凋まらば 香氣あり 春花を開く 白黄色粗蠟花乃如く 花後實成 結成 惡臭有り 毒深し 和訓義解 小志 さいはわい さいみ乃略也 云ぬ 誤り 紫沙糖と 同食せば 死す 及ぬ 魚小亦毒あり



芥



羊躑躅 本草綱目

大毒何り山中の産なり葉山躑躅に比されを長大なりと  
形粗石南の葉に似たり春黄花を開くきつと云ふ

綱目釋名云羊食其葉躑躅而死故名と

まんげつとハ其一種なり



墨園

有毒草木圖説

後

十

頰桐 本草綱目桐集解

本草綱目桐集解

毒何り南国の産に冬寒を畏る春其木を伐り植  
バ即活以葉桐子似る皴面厚圓邊齒何り夏枝頭に朵  
分ち五瓣朱赤色の花を開き長莖を吐く秋小至り収

久しきに耐也



墨園

衛矛 まいむす

本草綱目

小毒有り山中に生じ春新條成生し四面小箭羽乃如き者  
あり葉對生し秋に至り紅色即凋落し夏葉間小黃綠色  
乃小花を開き實成結ぬ秋後裂開し赤色此實毒深し小

兎懼へし



印

有毒草木圖説

後

十一

金剛纂 こんごうさん

事物紺珠

毒あり葉八九に缺刻し々光澤あり木乃高さ七八尺冬枝頭に  
小白花を開き積簇し花後實を結ぬ熟し々紫黒色大  
色成割ハ紫汁出ハ魚類を忌へし



印

槐木 たらのぎ

本草綱目

小毒あり山中に生じ枝幹都く尖刺多し春枝頂子葉を生じ  
 莖亦尖刺あり秋小至し凋落し葉間小白花を開き實  
 を結ぬ誤るればを啗バ齒を損げめらると云ぬあり其一種  
 なり



有毒草木圖説

後

十二

楊楹 いさぎ

本草綱目

毒有り



小木山中に多し葉春生じ細邊齒あり  
 兩對以夏葉間に筒花を開く淡紅色  
 又白色の者有り後莢を結ぬ



蠟梅 らふ びん

本草綱目

毒有り、蛮地の産あり、木の高さ丈餘、葉春生、尖峭、硬沙、冬深黄色、九瓣、乃花を開く、梅花に似、うち深紫色、九出、乃小瓣、有り、花後稀、小莢を結び、中に黒子あり、此子毒深、誤り、食せしめれば、卒嘔暴瀉也。



有毒草木圖説

後

十三

櫻櫚 さくらし

本草綱目



毒有り、枝ち、正直ふして、長トがた、多、壽あり、者なり、葉莖三稜、其本に鬚皮有り、長むる、毎に一層、四時凋、乃夏葉、莖乃本に苞を生、ト花を開く、黄色甚、密あり、花後實を結ぬ。





奴ヌやれレき

漢名未詳

毒あり深山小

夏花を生ナ

たけと云ぬ

よと出イむクぬ

誤アまシくテ毒あり

まシくテ笑ウを

毒あり物



生ナるク葉ハ楸ノ葉ニ似スるト團ノ冬ニ凋ル落ス

實ヲを結ぬル此ノ木ハ生ルるト草ニ似ス

其ノ形ハ香草に似スるト莖中

を香草に雜ヘるト其ノ者ヲ

者ヲ誤ルるトぬル生食

發ス九菌草類小

何レ此ノ書ハ小挙げバ

有毒草木圖説

後

十四

浸木アセドノキ

本草綱目

毒あり山中ニ生ルるト葉ハ細長鋸齒あり冬を經るト凋ル落ス春ニ新

葉ヲを生じ赤色其花ハ白色穂ヲを下垂ル後實を結

ぬ皆上ニ仰グ熟ス此ノ葉ハ牛馬食ルるト巴醉く如故

小和名馬醉木と云ぬ鹿食ルるト不時小角ヲを墮人此煎

汁ヲを嗅バ頭痛ヲ發ス



無患子

本草綱目

小毒有り深山小生低葉一莖に數葉發一冬凋落も夏枝  
末に小白花を開き實を結ぬ熟すと色は黄色其子黑色正圓  
至る堅硬其核外の肉を取る水に浸しあやぐんと云々  
小童あそびを戲と云

是甚ど不可なり



有毒草木圖説

後

十五

漆

本草綱目

毒あり山中及び村落乃叢林中に多し葉椿の如し葉  
數少く鋸齒あり夏花を開き實を結び秋に至ると熟すと  
樹皮乃汁を取らんとを製し漆と云物と鬚る又と云  
うるしと云ぬあり其一種なり



らふのみき

漆一種  
漢名未詳

毒あり 山及び野邊に多し 木の形漆乃如し 葉亦漆に似る 微く小く 秋花を開き 扁實を結ば 其子を採り 蟻を製し



有毒草木圖説

後

十六

棟

本草綱目

小毒あり 山中及び野邊に多し 葉春生し 一莖に葉分ち 五七葉を著し 花を開く 一朶數莖後實を結ば 熟

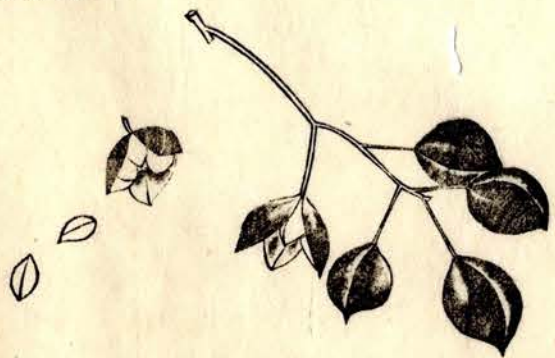
しと 黄色中に子あり



烏臼木 うきうぎ

本草綱目

毒あり漢種を傳へ植る葉扁薄淡綠色邊齒あり夏條末  
 小黄色の細花を生じ穂を垂し下垂し花後實を結ば熟  
 すと黒色中に子あり



有毒草木圖説

後

十七

嬰舌子桐 あうし 本草綱目

大毒あり山中に生じ葉春生じ三尖鋸齒あり夏五瓣の白  
 花を開き 實を結ぶ縦に三道をあり中に三隔  
 隔毎に各一子あり此子毒甚と深し



附録

本草綱目

芋

芋ハ其總名なり紫芋芋集鮮小毒有り春舊塊を種湿地小豆  
 一莖紫色長き者五六尺子及び葉綠色芋魁大きなり秋偶  
 花を生じ早生晩生乃葉間に發し莖頂即葩辦淡黄色  
 形粗半夏乃花の如一中に蘆有り後實を結ぬ夏より秋  
 小至つ芋魁の旁に子を生じ青芋同上も亦小毒あり其莖  
 青綠白粉を帯ぬ葉紫芋に異なりど秋偶花を生じ紫  
 芋は花の如し其子多し莖葉子俱小醜し多し食むれを  
 氣を塞ぎ痰を發し芋莖ハ血を傷る白芋同上ハ莖を生

有毒草木圖說

後

十八

食して害す根毒深し食むべしむ亦

野芋ハ前編子舉ぐ食用乃ものにあは



白川田  
 農夫

番椒

食物本草

毒有り春下種も枝を分ち高さ一二尺夏葉間毎に小白花を開き實を結び下垂し赤色辛味猛烈なり又上子仰生じたる者或ハ

あまを肌膚に多食もれば發も妊婦



豊文

多食もべりしは墮胎に

貼も其處必も熱を催し血を滞らし諸瘡を

有毒草木圖説

後

十九

甜瓜

本草綱目

小毒あり春下種し蔓延し其節毎に葉を生じ黄花を開き瓜を結ぶ初緑色熟もれば黄色或ハ青色多く食もべりしは黄痘を發し眼を害も脚氣の之れを食もれば平愈也がし兩鼻兩蒂乃者甚く毒深し水に沈その食もべりしは蘿摩油煤と同食もべりし其汁刃劔子傳バ忍鍼を生じ又うをうりし云ぬ有り其一種なり

傲霞



胡瓜

本草綱目

小毒あり春下種し蔓延し葉冬瓜似し細毛あり夏六瓣乃黄花を開き瓜を結成疣子あり初緑色熟すれば赤黄色又白色乃者何り多食すれば瘡を發し上逆せしめ陰血を損じ疥癬を發し小兒忌む妊婦食すとす  
 瓜越瓜 同上 毒あり多く生食すれば臍下り塊物を生じ諸瘡を發し小兒病人食すとべし



瓜

有毒草木圖説

後

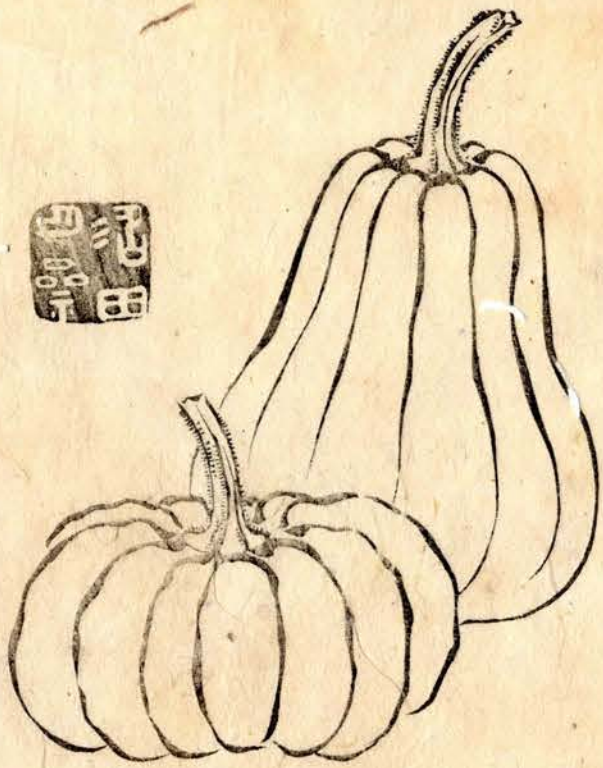
三

番南瓜

群芳譜

毒あり春下種し蔓莖葉皆毛茸有り夏中黄花を開き瓜を結ぶ多く食すと血を傷じ妊婦食すとす形扁なる瓜の南瓜  
 本草 綱目 圓く紅く赤色乃ものを紅南瓜 圖史 胡椒と同食すと  
 うり瓜 甚く毒あり九

同食林示忌乃ものハ  
 別子一卷を撰む

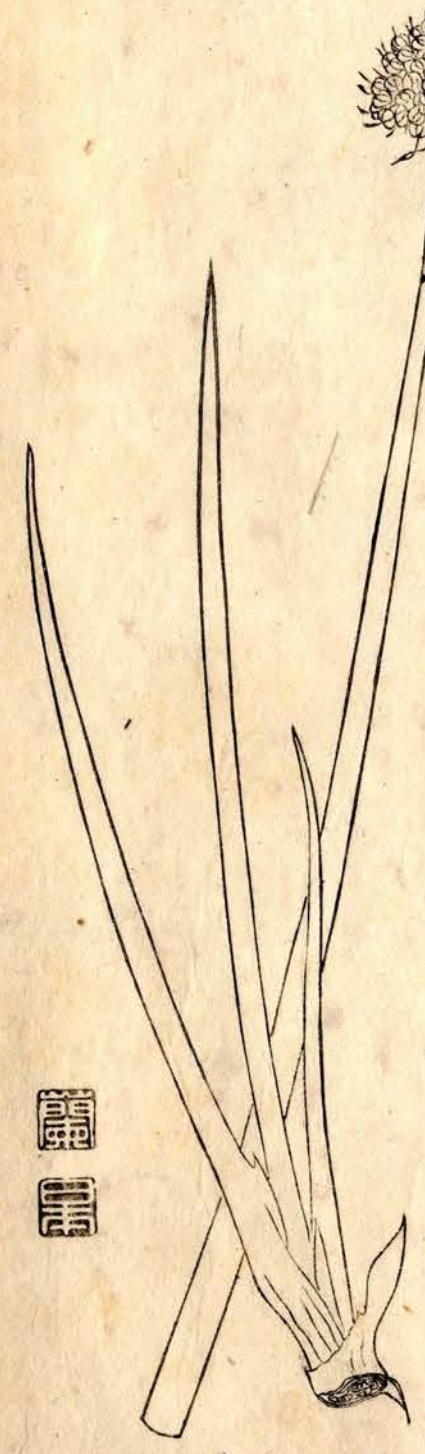


田記

青葱

鎮江府志

小毒有り圓葉内空虚末尖又臭氣あり夏の初莖を抽ぐ莖頂  
子小白花簇々毬をなす後實を結ぬ蜜棗鶏と同食せしむ  
〜〜〜地黃を服せしむ人忌べ〜妊婦食せしむ〜の謗小云ぬ  
妊娠中に食せしむれば其子胎臭を發せしむ〜丸〜葷菜類皆忌べ〜  
梅雨乃頃刈り食せしむ〜そのを漢葱 本草綱目と云ぬ冬葱  
同上と別種花實せしむものやると毒あり



關

有毒草木圖說

後

二十一

大蒜

本草綱目

毒あり山野小生じ葉内蒜より長大夏莖頂子先ハ紫色の  
實を生じ其間に白花を開く根莖葉實皆臭氣あり其汁  
眼小入もバ痛病も多し食せしむバ盲瞽となり痰を發し  
毛髮を白くし蜜と同食せしむ大毒人を  
殺す



關



山蒜 さんきん

本草綱目

小毒あり 山原平地皆あり 葉細長臭氣甚く 根塊大蒜より  
 小なり 初夏莖を抽ぐ 白花を開き 實成結成小蒜 本草綱目  
 色亦小毒あり 山蒜を圃中に栽り 培養する者あり 別種より  
 けり 又薤本 薤と毒あり 然れども 三四月に生食せしむべし



有毒草木圖説

後

二十三

蒟蒻 こすげ

本草綱目

毒あり 夏舊塊を播り 即生 莖緑色 紫黑色 乃斑點あり 末に  
 莖を分ち 一莖に數葉を著く 心中より花を生じ 黑色 瓣末初  
 尖り 後開花し 尖  
 製し する者を  
 人食せしむべし  
 忌む 五疳を動らす

其根芋魁の如く 食用に  
 褐腐 物理と云 ぬ瘡をせせ  
 癩癩を發せし 小兒食せしむ



毒あり春下種も葉嫩時紫色莖も亦紫色後綠色刺あり夏  
 より秋子至く薄紫色六七瓣或八九瓣乃花を開き蒴を結  
 ぬ生處定らざり莖中に生く色紫黒光澤あり蒴に刺  
 あり子番椒子乃如く瘡を患へ人食もくく凡秋後子  
 至り毒深し綱目云李延飛曰秋後多食損目時珍曰按生  
 生編云茄性寒利多食必腹痛下利女人能傷子宮尤其  
 变种或ハ兩蒂乃者毒深し必も食もくく凡世俗乃諺小  
 云ぬ秋茄ハ其味美なり故子姑乃婦が思ぐ食せしめんと  
 或ハ云ぬ秋茄を子少し故子婦不食せしむる大く勿と是  
 皆甚く誤也子宮を傷るれ説を用ふべし或歌

有毒草木圖説

後

秋 茄子 早酒 糟 漬 和  
 あまきちすびわさくのうけ小漬けませく  
 婦 不 養 棚 置 雖  
 よめ子わくまにたむにわくとえ

此歌乃出處何れの書あるやいづれを辨むといへ  
 とも古人の歌よる據ごころなきやむわね秋茄毒  
 あるの意あらざり



水蘊

本草綱目

春夏毒あり野邊溝瀆中に生じ葉一莖小數葉邊齒有  
夏莖を抽ぐ小白花を開く醋小和して食すれば齒を  
損ぐ妊婦ふもを忌べく多く食すれば墮胎に商陸芥  
龍と同食もべく



四 毒

有毒草木圖說

後

二十四

藜

本草綱目

微毒あり春下種も葉初紅紫粉を傳く後青綠色嫩時  
夜中葉面相萎む枝を分ち五六尺不及び秋細小白花を  
開き小子を結ぬ又一種青白色乃粉成傳く者八灰藜  
綱目  
と云ぬ



四 毒

恭菜 こんさい

本草綱目

微毒有り春下種こしげも又不時ときどき小下種こしげも生なむ宿根しゆくこん亦葉またを生なは葉莖えふく三枝さんし柔軟じやくなん葉緑色あざな光澤あざなあり夏莖なつくきを抽ひき細こ小白花こはくはなを開ひらき穂ほをなり細子こしを結むすぬ胡椒こしょうと同食どうじもへんがら大毒おほいどくあり



四 毒

有毒草木圖說

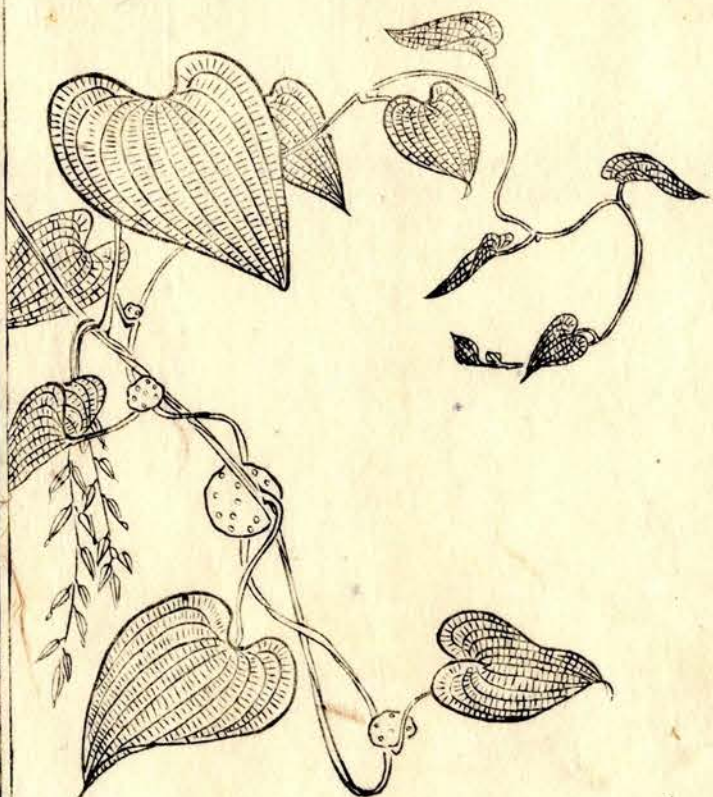
後

二十五

土芋 かまゆい

本草綱目

小毒あり春子はるこを播まき蔓生まは其葉その薯蕷じゆいの葉は子類こも夏なつより秋あきに至いたる葉間えふまに花はなを生なす子こを結むすぶ亦花またわらむら子こを生なむらとあり其根塊その鬚多ひげ委あやハ性譜せいふに舉あぐ



四 毒

つば

漢名未詳

小毒あり春下種よく葉柔軟互生し繁行は夏に至り葉間毎  
に四瓣の花を開く外緑色内黄色花後實を結ぬ多く食  
と入るべし



有毒草木圖説

後

二十六

菠薐

本草綱目

小毒あり秋子を播き葉始尖ち後一尖旁に兩尖或は四  
尖をもち莖を生ずるに及ぶ其兩尖四尖を止む柔ふ  
て厚し莖根赤色夏莖を抽け雌雄は雄は花を生じて  
實を結むは雌は花を生ぜば一  
て芥鰻鱺魚と同食を忌む五倍  
子と反故小鉄漿に忌む古書  
に鉄漿を附し日食をれを  
死に及ぶと云ぬ



煙草 えんそう

本草彙言

毒有り本蛮國より傳ゆ春下種は葉淺綠色互生し毛茸有り  
 高さ三四尺秋莖を抽て莖末に數花を開く胡麻の花小似する筒  
 を成し五瓣淡紅色花後實を結ぬ常に用ひて厭はざりといへど  
 も其氣猛く煙胃に通じて熱を成りて頻りに用まら  
 上嘔下瀉せしむ



有毒草 木圖説

後

二十七

葛苳 くこきま

本草綱目

微毒あり秋下種し葉淺綠色皺あり夏莖を抽て小黄花  
 を開く葉莖ともに白汁出づ莖を折てバ子熱し易く多食す  
 其眼を害し大蒜鰕類蜜と同食を忌む莖葉紫色を帯る  
 者毒甚く深し人を殺す凡く毒あり者ハ

黄汁白汁乃出

者多

罌子粟

本草乃殺し白汁ハ

大毒あり其嫩苗を食すハ長むれど

食すべし



玉蜀黍

本草綱目

微毒あり春下種も蜀黍に似て肥大なり夏秋乃際に至り  
莖頂子穂をとり花を生じ葉間小苞生じ  
其中に數子あり形状性譜小委  
多く食すと消化  
とて甘草と  
同食を忌む



玉蜀黍

有毒草木圖說

後

二十八

水蘿蔔

群芳譜

微毒あり秋下種も葉乃形葉根子異なり  
只小なるは根細長二三尺子乃必ず妊婦食すと積氣あり人食すと忌む



水蘿蔔

藜荷

本草綱目

めをどが乃あくふふ小毒あり陰湿樹下に宜し春宿根より苗  
 を生じ生薑に似く大なり初生をめをがく付く二毒あり  
 根の旁より花を生じ莖心に至るまじ葉々相重る頂花を開  
 く實を  
 消火

結むば夏秋の二種あり多食すとむば薬力を  
 結むば夏秋の二種あり多食すとむば薬力を



回音

有毒草木圖説

後

二十九

甘蔗

本草綱目

暖土の産けり寒を畏る冬窖中に藏春に至り其幹を節々  
 截り暖地を栽む節毎子芽を生じ長じむを  
 六七尺及び長葉あり  
 小似く花實あり  
 とく毒あり  
 毒あり丸  
 あり此餘

其幹を製し白沙糖紫砂糖  
 橐吾と同食すとむば大  
 造製物の酒豆腐瓊脂等毒  
 略す

粗蜀黍



印



羊栖菜 閩書

微毒あり海中岩石に附生し細圓枝を成し黒色狀水松乃如  
 小くても小くても虎栖菜 同書ハ長圓稍肥大なり多食すと血  
 動る



有毒草木圖說

後

三

筍

本草綱目

毒あり食用にまろろの淡竹苦竹江南竹等なり形狀委しくハ  
 性譜小擧ぐ多食まれや虫積を動る此餘品最食まろろハ  
 魚沙糖油燥類と同食を忌む



秦椒 さんせう

本草綱目

毒あり春葉を生じ夏小花成開き擷簇一實を結成是  
 雌かり花を開き實成結ぶざる者は雄かり口閉の者ハ毒  
 深し蜀椒同上の毒秦椒も同じ多食すれば血脈を傷目も  
 損む其子葉を池水の中に投じれば魚皆  
 死に又小紅蟲成魚に飼小秦椒の氣を  
 受る者を用きバ其魚皆死に



有毒草木圖説

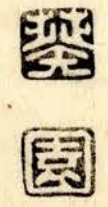
後

三十一

桃 たう

本草綱目

微毒あり春葉を生じ秋に至り凋落し樹皮の間より脂を生  
 じ樹長じ易く大抵三四年に一回花を開き實を結ぶ品類多  
 し多く食すとせば癰癤を發せし  
 癰病瘡疾 を煩ふ白木を服  
 又食して後水子入せば  
 とうとう人子忌む



杏

本草綱目

小毒あり木

らげ花終

らげ



梅乃如<sup>ら</sup>一<sup>は</sup>春薄<sup>はる</sup>紅色<sup>こうしき</sup>乃<sup>は</sup>花<sup>はな</sup>を開<sup>ひら</sup>く梅<sup>うめ</sup>花<sup>はな</sup>子<sup>こ</sup>異<sup>こと</sup>な  
も<sup>も</sup>バ<sup>ば</sup>即<sup>すなは</sup>葉<sup>は</sup>を<sup>を</sup>生<sup>な</sup>む亦<sup>また</sup>梅<sup>うめ</sup>乃<sup>は</sup>葉<sup>は</sup>ハ<sup>は</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>實<sup>み</sup>を<sup>を</sup>結<sup>む</sup>ぶ  
多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>食<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>バ<sup>ば</sup>宿<sup>しゆく</sup>疾<sup>ぢやく</sup>を<sup>を</sup>動<sup>うご</sup>く<sup>く</sup>産<sup>う</sup>前<sup>まへ</sup>後<sup>ご</sup>食<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>  
小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>食<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>バ<sup>ば</sup>瘡<sup>そう</sup>癰<sup>おう</sup>隔<sup>かく</sup>熱<sup>ねつ</sup>を<sup>を</sup>煩<sup>わづ</sup>ふ<sup>ふ</sup>仁<sup>に</sup>二<sup>に</sup>あり<sup>あり</sup>  
人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>殺<sup>ころ</sup>す

有毒草木圖説

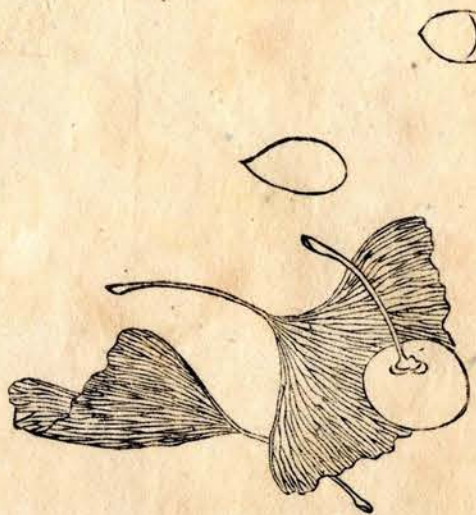
後

三十一終

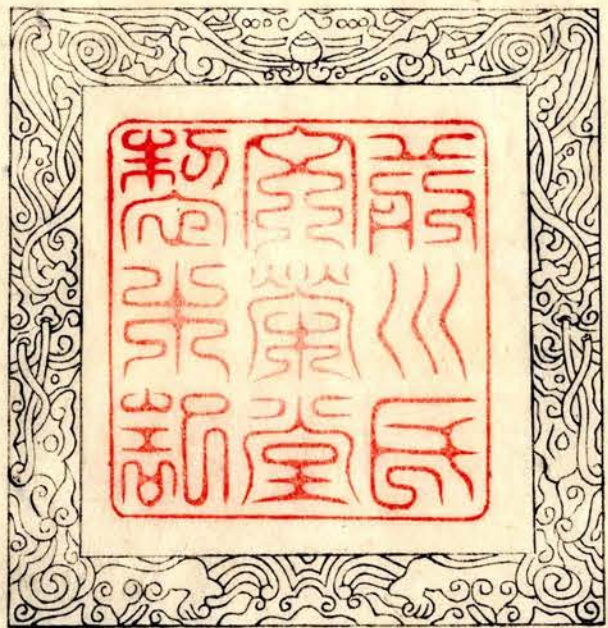
銀杏

本草綱目

生<sup>な</sup>小<sup>せう</sup>毒<sup>どく</sup>あり<sup>あり</sup>熟<sup>じやく</sup>子<sup>こ</sup>毒<sup>どく</sup>あり<sup>あり</sup>樹<sup>じゆ</sup>乃<sup>は</sup>形<sup>かたち</sup>狀<sup>じやう</sup>性<sup>せい</sup>譜<sup>ふ</sup>以<sup>も</sup>拳<sup>けん</sup>ト<sup>と</sup>此<sup>この</sup>果<sup>くわい</sup>雌<sup>あめ</sup>雄<sup>おとこ</sup>あり<sup>あり</sup>  
亦<sup>また</sup>性<sup>せい</sup>譜<sup>ふ</sup>子<sup>こ</sup>季<sup>き</sup>生<sup>な</sup>す<sup>す</sup>食<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>色<sup>いろ</sup>を<sup>を</sup>酒<sup>しゆ</sup>毒<sup>どく</sup>を<sup>を</sup>解<sup>が</sup>し<sup>し</sup>痰<sup>たん</sup>を<sup>を</sup>降<sup>くだ</sup>す<sup>す</sup>虫<sup>むし</sup>  
を<sup>を</sup>殺<sup>ころ</sup>す<sup>す</sup>熟<sup>じやく</sup>し<sup>し</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>食<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>れ<sup>れ</sup>バ<sup>ば</sup>氣<sup>き</sup>を<sup>を</sup>塞<sup>ふ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>驚<sup>おど</sup>風<sup>ふう</sup>を<sup>を</sup>發<sup>た</sup>す<sup>す</sup>疳<sup>かん</sup>積<sup>せき</sup>  
煩<sup>わづ</sup>ふ<sup>ふ</sup>鰻<sup>うなぎ</sup>魚<sup>いそ</sup>ト<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>食<sup>じき</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>ト<sup>と</sup>ど<sup>ど</sup>



同題



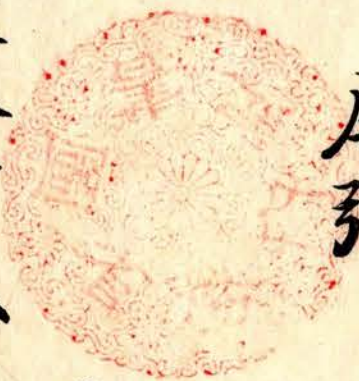
有書畫不圖說

文政十年丁亥季冬

尾張

彫工 中村屋次助  
摺工 中島九兵衛

製本書林



大坂心齋橋通北久宝寺町

名古屋本町三丁目

河内屋源七



菱屋藤兵衛

分類	499.9
書號	
原書號	<del>1106</del> 11618
國立中央圖書館	



